様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年４月９日現在

機関番号：13601
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22730537
研究課題名（和文）　児童臨床場面におけるフィンランド式キッズスキル導入のための効果測定研究
研究課題名（英文）　Measuring effects of Kids' Skills Approach for Children and Parents
研究代表者
鈴木 俊太郎（SUZUKI SHUNTARO）
信州大学・教育学部・准教授
研究者番号：10548233

研究成果の概要（和文）：本研究では，フィンランドでも代表的なカウンセリング・心理教育モデルであるキッズスキルの効果測定研究、効果機序研究を行い，具体的技法イメージの提供と効果・課題を検討することを目的として計画された。キッズスキルのプログラムには 15 のステップが用意されており，段階的に実施することで問題解決につながるスキル学習が楽しく行えるように工夫されている。本研究の結果，我が国で実施したカウンセリング、心理教育としての一定の改善効果が示された。拡大―構築理論に示される通り，ポジティブ感情を利用した介入により，クライエントの自尊心の回復，そして自己効力感の向上などの認知的改善要因が見られ，肯定的な変化を生じさせたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：“Kids' Skills” is a well-known counseling and psycho-educational model developed in Finland, specifically for measuring the effects and mechanism. The program consists of 15 steps, designed to teach problem solving skills. These steps are fun and children usually have enjoyable experiences of learning Kids' Skills. The results showed definite improvements for counseling and psycho-education. As indicated on broaden-and-build theory of positive emotion, the intervention with positive emotion recovered their self-esteem. Moreover, their self-efficacy for problem solving also improved. As a result, the child showed improvements.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	400,000	120,000	520,000
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：臨床心理学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：キッズスキル、ソリューション、ブリーフセラピー、児童臨床、効果測定研究、遊戯療法

１．研究開始当初の背景

本研究の背景に関して、研究の位置づけと、対象となるキッズスキルについて説明する。

(1)　本研究の位置づけ

本研究は，臨床心理学領域における，カウンセリング技法の効果測定研究の一部として位置づけられる。アメリカを始めとする欧米諸国では，有資格者によるカウンセリングについて保険制度が確立されているため，早くからエビデンス・ベイスド・カウンセリングという言葉が叫ばれてきた。しかし，資格制度や保険制度が確立されていない我が国では，効果測定が十分に行なわれないまま，

事例研究が積み上げられてることをもって，技法の効果とする論調がいまだ大勢を占めている。本研究は、それを補完するという意味で統計的手法を用いた量的分析も併用しながら，我が国で未だ認知されていないフィンランド式キッズスキルという新しいカウンセリング・心理教育モデルについてエビデンスの提供を意図するものである。

(2) キッズスキルとは

キッズスキルとは，フィンランドの精神科医であるベン・ファーマンによって提唱された，カウンセリング・プログラムである(Furman, 2003)。この技法は，ブリーフセラピー，特にソリューション・フォーカスト・アプローチの影響を強く受けたものであり（小野, 1998)，現在 11 カ国でその技法が著書として紹介されている。我が国では，キッズスキルについては，原著の翻訳が一冊刊行されているのみであり（佐俣, 2008)，まだその技法の認知は進んでいない状況である。当初は家庭内における発達障害，虐待などに対するカウンセリング技法として開発されたが，現在ではその適用範囲を広げ，フィンランド国内では一般的な子どもにも適用可能なカウンセリング・プログラムおよびペアレント・トレーニングの代表的モデルとして認知されている。

２．研究の目的

フィンランドは，教育の面で優れたシステムを有するという点で有名だが，子育てに関する心理臨床領域で，非常に優れた対応システムを有していることはあまり触れられてこなかった。特に，我が国で昨今増加しつつある，虐待や発達障害，問題行動事案等，子どもの心理的問題に対応するための，カウンセリング，心理教育モデルが充実しているという特徴がある。そこで，本研究では，フィンランドでも代表的なカウンセリング，心理教育モデルであるキッズスキルの効果測定を行い，その効果を確かめた上で，普及のための基礎的資料を提供することを目的とする。

３．研究の方法

本研究では、以下の 2 つの検討事項を中心に研究を実施した。

(1)キッズスキルのカウンセリングモデルとしての有効性

第一に，キッズスキルのカウンセリングモデルに従ったカウンセリングを行なった場合，クライエントの症状や問題に対して一定の有効性が見られるのかを明らかにした。鈴木（印刷中）によって開発された，SFBT 満足感尺度（セラピーへの主観的満足感を測定する尺度）を質問紙調査の形で実施し，効果の指標とし，キッズスキル実施群，その他の面接技法実施群とで効果の差を群間比較を行った。また、事例的検討を行い、なぜ、キッズスキルが有効性を発揮するかという効果機序についても検討を行った。

(2)キッズスキルの心理教育モデルとしての有効性

第二に，キッズスキルを保護者向けの講演会等で心理教育した場合，保護者にどのような影響を与えるかという点について検討を行った。佐俣（2008）によれば，特に子どもを中心とした家庭問題に苦しんでいる場合，キッズスキル学習者は自尊心の回復，問題対応自己効力感の回復，子どもとのコミュニケーションの増加といった肯定的影響が事例から予測されるとしている。よって，心理教育の一環として，キッズスキルを学習した対象に対し，事前と事後で，保護者のための児童・生徒問題行動対応自己効力感尺度（鈴木，2004）などの従属変数がどのような変化を示すかについて比較を行った。

４．研究成果

上記の各種検討について、手続きを含めて結果を述べる。なお、紙面の都合上、(1)の研究について詳細を述べ、(2)～(5)については概略を述べることにする。

(1)キッズスキルのカウンセリングモデルとしての有効性

・キッズスキルの有効性を測定するための指標作成「SFBT 満足感尺度の作成」（鈴木，2010）

本研究は、ソリューション・フォーカスト・ブリーフ・セラピー面接におけるクライエントの満足感測定尺度を目的として計画された。予備調査において選定された SFBT への満足要因を質問項目として用い、205 名の対象に質問紙調査を行った。因子分析の結果、全 22 項目、4 つの因子を持つ SFBT 満足感尺度が作成された。4 つの因子はそれぞれ、“環境リソースへの気づき”、“カウンセラーとの一体感”、“自己リソースへの気づき”、“効率的な解決構築”と命名された。また、本尺度の基準関連妥当性を検証するため、既存の心理測定尺度との関連性の検討を行ったところ、それぞれの尺度と、下位因子との間に相関が見られた。本研究を通して、一定の妥当性と信頼性が保障された、クライエントの満足感尺度が作成された（表１）。

表１　SFBT 満足感尺度

表2　SFBT満足感尺度の因子分析結果(Promax回転後)

項目内容	因子負荷量 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
第1因子「環境リソースへの気づき」				
困ったときに1人で悩まなくなった	**.79**	.12	-.08	.02
自分は周囲から孤立していると感じた	**-.67**	.02	.05	.09
色々なところに助けてくれそうな人がいることに気づいた	**.65**	-.10	-.02	.01
自信を失う場面があった	**-.59**	.08	.11	.08
家族に相談できるようになった	**.47**	-.13	.11	.06
当初の症状・問題以外にも悩むことが増えた	**-.43**	.09	.02	-.08
1人でがんばっていた気がした	**-.36**	.11	-.18	-.16
第2因子「カウンセラーとの一体感」				
カウンセラーの話を素直に受け止めることができた	.11	**.75**	.08	-.03
カウンセラーが自分のことのように共感してくれた	.08	**.73**	.01	-.08
カウンセラーがとても親身になってくれた	.01	**.68**	-.09	.02
カウンセラーと対立する場面があった	-.10	**-.65**	.12	.05
カウンセラーを信頼していた	.09	**.52**	.03	.11
お互いのことを尊重しあって話し合うことができた	-.15	**.41**	.14	.09
第3因子「自己リソースへの気づき」				
気づかなかった自分の良さを引き出してもらえた	.06	.02	**.76**	-.01
症状・問題をそれほど困難に感じなくなった	.08	.05	**.64**	.06
自分のことが、面接を通して好きになれた	-.08	.12	**.53**	-.07
自分のできていること、できないことの整理がつけられた	-.09	-.08	**.44**	.14
自信を失う場面があった	-.15	.11	**-.39**	.21
第4因子「効率的な改善」				
カウンセリングに期待していた自分の目標が達成された	.03	.09	-.06	**.64**
いち早く症状・問題が改善した	-.02	.11	.07	**.65**
事態が改善するまで多くの時間を費やした	.08	.19	-.12	**-.53**
自分が当初予測していなかった成果があげられた	.09	-.11	.23	**.40**
因子間相関行列	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	-	.12	.45	.33
Ⅱ		-	.15	.28
Ⅲ			-	.42
Ⅳ				-

・事例によるキッズスキルの有効性の検証（鈴木，2012）

本研究では，フィンランドでも代表的なカウンセリング・心理教育モデルであるキッズスキルの事例研究を行い，不登校傾向児童に対する具体的技法イメージの提供と効果・課題の検討をすることを目的として計画された。

キッズスキルのプログラムには 15 のステップが用意されており，段階的に実施することで問題解決につながるスキル学習が楽しく行えるように工夫されている。本研究では，不登校傾向を持つ小学校４年生女児，不適応行動が問題となっている小学校５年生男児に対して，著者がキッズスキルを用いてスクールカウンセリングを実施した。結果，いずれの事例においても，短期間の面接後一定の改善が示された。キッズスキルによるゲーム感覚の楽しい取り組みが次第にクライエントの自尊心を回復させたこと，スキル実施の自己効力感を向上させたことなどの改善要因が，比較的短期間で肯定的な変化を生じさせたと考えられる（効果機序を図１に示す）。

(2) キッズスキルの心理教育モデルとしての有効性

・キッズスキルの学習と支援がもたらす情緒的支援効果の測定（鈴木・飯村・荒木・大和，2011）

キッズスキルを心理教育として採用し、学習をした結果、教師の不登校対応自己効力感が上昇するかどうかを検討した。

結果として、教師は学習前に抱いていた自身の不登校への対応の自信が、全般的に向上していることが明らかとなった。特に、具体的な登校支援に関する自信が上昇している点、他者・他機関との連携に自信が持てるようになっている点が特徴的であると言える。さらに追跡調査を行った３か月後の時点でも、同様の効果が持続、もしくは向上していることが明らかとなった（図２）。

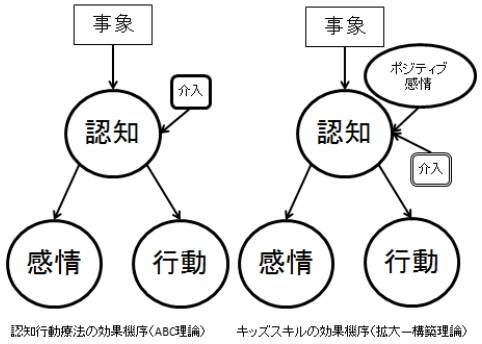

図１　キッズスキルの効果機序

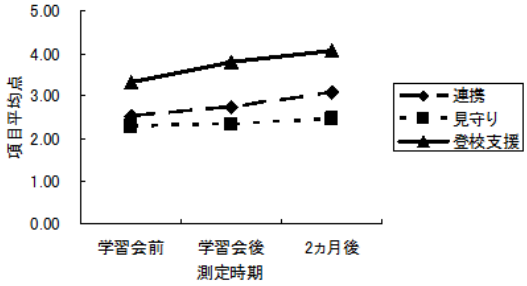

図２　不登校対応自己効力感の変化

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 鈴木俊太郎（2012）．キッズスキルを用いた不登校傾向児童とのスクールカウンセリング事例．ブリーフサイコセラピー研究．21，pp. 5-22．査読有

② 伊藤絵美・丹藤克也・鈴木俊太郎・坂本真士（2011）．ＣＢＴの心理学的基盤．認知療法研究，4，pp. 99-110．査読無

③ 鈴木俊太郎・飯村昌史・荒木志穂・大和友則（2011）．キッズスキルの学習と支援がもたらす情緒的支援効果の測定．信州大学教育学部研究論集，4，pp. 145-152．査読無

④ 鈴木俊太郎（2010）．ソリューション・フォーカスト・ブリーフ・セラピー面接におけるクライエントの満足感測定尺度の作成．ブリーフサイコセラピー研究，19，pp. 1-14．査読有

〔学会発表〕（計５件）

① 久保田佳折・鈴木俊太郎（2013.5.11～12）．教職志望大学生に対する SST プログラムの開発．東北心理学会第 67 回大会（東北工業大学）

② 清水妙・鈴木俊太郎（2013.5.11～12）．キッズスキルを用いた失敗経験に対する原因帰属を促すプログラムの開発．東北心理学会第 67 回大会（東北工業大学）

③ 鈴木俊太郎・島田英昭・村上千恵子（2012.7.14～15）．ソリューション・フォーカスト・ブリーフ・セラピーを経験した不登校サバイバー学校復帰プロセスの TEM による検討．東北心理学会第 66 回大会（新潟大学）

④ 鈴木俊太郎（2010.9.24）．カウンセリング及び心理療法における効果について．日本認知療法学会第 10 回大会（愛知県産業労働センター）

⑤ 鈴木俊太郎・飯村昌史・荒木志穂・大和友則（2010.9.4）．キッズスキルの学習と実践がもたらす情緒的支援効果について―キッズスキル学習者の不登校対応自己効力感の変化について―．日本心理臨床学会第 29 回大会（東北大学）

６．研究組織

(1)研究代表者

鈴木　俊太郎（SUZUKI SHUNTARO）
信州大学・教育学部・准教授
研究者番号：10548233